

ハイドン／交響曲第 55 番変ホ長調 Hob. I :55「校長先生」

1761 年、エステルハージ侯爵家の副楽長となったハイドンは、5 年後に楽長に昇格、音楽愛好家のニコラウス侯が亡くなる 1790 年まで侯爵家の音楽活動すべてを任せられた。オーケストラのメンバーから「パパ・ハイドン」と慕われ、指揮者としての豊富な現場体験と平行して、「交響曲の父」と呼ばれるにふさわしい数多くの交響曲が生まれた。

1790 年までに 90 曲余りに達した彼の交響曲には、ニックネームのついたものが数多い。たとえば、有名な交響曲第 45 番「告別」は、夏に侯爵家の居城に滞在する楽団員たちが早く帰郷したがっていることを伝えようと、しだいに楽器の数を減らして団員が次々に退場していくユーモラスな趣向が施されていることからこう呼ばれるようになった。楽器の音から連想して「熊」や「雌鳥」のニックネームを持つ曲や、理由は不明だが「哲学者」と呼ばれる曲もある。

では、本日演奏される「校長先生」の由来は…第 2 楽章の主題冒頭の規則的なリズムが学校の先生を思わせるという説が知られているが、真偽のほどは不明である。

第 1 楽章：アレグロ・ディ・モルト、変ホ長調、4 分の 3 拍子。ソナタ形式。風格のあるひきしまった音楽である。

第 2 楽章：アダージョ、マ・センプリチェメンテ、変ロ長調、4 分の 2 拍子。変奏曲の形式による。

第 3 楽章：メヌエット、変ホ長調、4 分の 3 拍子。トリオはヴァイオリンと独奏チェロのみとなる。

第 4 楽章：フィナーレ、プレスト、変ホ長調、4 分の 2 拍子。変奏曲による晴れやかな終曲。

遠山菜穂美

楽器編成：オーボエ 2、ファゴット 1、ホルン 2、弦 5 部

* スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。